WASON
HQ
1104
J74+

Aug. 1894
no. 394

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百九十四號

要目

朝鮮開導論

是れ久しく朝鮮に在りて大院君と熟知し、多年半島の開導に掛慮せし士人の立說たり。宜なる哉、着眼警拔にして、所論世表に卓出することや。

美妙及び紅葉
園照夫人
外國宣敎師論

魂迷月中刄　悲劇

深入淺語なく、稀作妙句多し。此劇初めて文壇に登る年少文士が數年の結構より成る。意匠滲澹、經營辛酸をつくす。世上濃厚の人少なからず、請ふ審らかに讀味して其眞を掬せ。

內村鑑三君義戰論
勇士末期の手帋
夕涼み（韻文）

合同義捐の道

前號逸事の主人某氏が、聖經の一奇跡に與へたる新解釋に筆を起して、五箇のパン二尾の魚の能く五千人を飽かしめたる聖旨を學ぶ實に目今の時敎。

明治二十七年八月廿五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十四號目録

社説
合同義捐の道

寄書
朝鮮開導論（革堂）

書架
美妙及び紅葉
園照夫人と妾との關係
外國宣教師論
今回の交戰を義とす

論説
嬰兒の精神及び其發達（其六）竹内楠三
第六、注意

徒然草
人相ひ評するを聽く（停吟行人）
夕涼み（豆子）

兒籃
勇士最後の手紙（上）朧子譯

時報
岡山の高等女學校○倚松園女塾○函館裁縫專門學校特別認可願○私立順正女學校新築の計畫○名古屋市の女子學術講習所○中村女子手藝傳習所◎貞婦の賞與○貞婦赤鬼なつ子○清兵本邦婦人を凌辱す○篤志看護婦人會○恤兵に關する幻燈會○神奈川縣婦人同盟會○靜岡高等女學校生徒の美擧○篤志の婦人○女子講の義擧○婦人信義會員の獻金○宮城縣婦人會と看護婦人會○笠原光雄の細心◎薔薇一枝（七峰生）

悲劇 魂迷月中刄（阿波寺鳴門左衞門著）
一名、桂吾良

女學雜誌

第三百九十四號

明治二十七年八月廿五日發兌

社説

合同義捐の道

前號に記載したる、美なる逸事の常主人某氏、曾つて聖經の一奇跡につきて、新らしき解説を立てたり。經に云く、

耶蘇、ヨハネの殺されたることを聞きて、人を避け舟に登て其處を去り、さびしき處に往き給ひしが、衆人きゝて歩行にて彼に從へり。耶蘇、出でて多くの人を見て之を憫れみ、其病る者を醫せり。日くるる時、その弟子來りて曰けるは、此は寂寞ところにして時も早や遲し、諸邑に往きて自から食を求めさせん爲に人々を去らしめよ。耶蘇、彼等に曰けるは、人々往かずとも可し、汝等之に食を予へよ。答へけるは、我儕こゝにたゞ五つのパンと二つの魚あるのみ、イエス曰けるは、其を此に携ち來れ。遂に衆人に命じて坐らしめ、五のパンと二つの魚をとり、天を仰ぎて謝し、パンを擘て弟子に與ふ。弟子之を衆人に予へぬ。皆な食ひて飽き、其の餘りたる屑を拾ひしに、十二の筐に盈ちたり。食ひしものは、婦と幼童の外、凡そ五千人なりき。

通常、人これを觀て超自然の奇跡とせり。奇跡の有無、能不能は、しばらく茲に論ぜずして、試ろみに此の一事實をあげて仔細に觀察すれば、之に超自然の趣意を寓するは、則はち之に含まれたる最とも高貴なる示教を埋沒するものなり。曰く、汝等之に食を予へよと。此の一句、全躰の急所を露はして明々白々にあらずや。

女の產みたる人の子のうち、ヨハネより大なるものなし。彼れ熱誠にして高潔なり、彼れ剛毅にして謙遜なり、彼れ烈火の如くして、亦た白露の如し。彼が、クリストを見るや、則はち曰く、吾は彼の靴の紐を解くにすら及ばず、彼は之よりして日々に榮え、吾は日々に衰ろふべしと。之れ既に何等絕

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

大の犧牲なる哉。而して、彼は遂に淫婦ヘロデアの故に身を殺ろさるゝことを容して、命を與へて以て之に終末の傳道を爲したり。

耶蘇、ヨハネの殺されたるを聞きて、痛歎禁ずる能はず、囂々たる人衆を避けて、獨りさびしき所ろに入り、心限り泣き、心限り歎じ、亦た心限り天父に祈りたり。久しふして后ち出で、衆人が尾して此に來りしを喜こび、其の多く病者を携さへて療されんことを待つを憫れみ、則はち之を醫やし、更に起つて道を傳ふ。道を傳へて、日くるゝ頃に及べば、弟子衆人を去らせて晩食を執らしめんと言へり。耶蘇、則はち曰く、人々往かずとも可し、汝等、之に食を予へよと。

與ふるは、受くるよりも幸福なり。蓋し、人の至情、與へんことを欲す。與ふるの情は、人皆な之れ有り、たゞ之を露はして、自由に寄する所ろを得ざるを苦しむ耳。而して、寄する所ろを得ざるは、情感の平ならざるによつて慈眼の掩はれたるに根づく。人、超然たること難く、屢ば、情緒を激することあり、則はち美を觀ずるの眼こ發揮せずして、其が至情を寄するに足るの吸引を受けざるに至る。人の性、義捨を好みて而も實際に行なふ所の者少なきは、之に職由する也。此故に、至情迸ばしり、慈眼ひらけ、區々たる情感の雲散ずる時に於ては、人は狂喜踴躍して他に與へんことを欲す。此時に當りて、もし己を献じて他に喜捨するものあるを見ば、吾も亦た悅喜して之に同ぜんことを樂しむは、即はち、人の自然なり。

彼の逸事の人、此邊の消息を天より傳へて曰く、一人もし率先して己を献ずれば、之を見て之を喜こび、狂するが如く之に倣はんとするを樂しむは、人の至情なり、われ幾度びか其の實際を見聞したり。左れば、彼の時、耶蘇は道を說きて時を忘れ、衆も亦た日の暮れんとするを忘れたり。此に於て、晩餐の說あり。耶蘇則はち曰く、汝等、自から準備したるものを悉とく予へよ、たとひ分に充ちずと雖ども、亦以て慰さむるに足らんと。其の携さへたる總ての食品を分たしめたり。時に、人衆四千人、豈に其の間だに多少の準備なからんや。弟子は彼等みな食なしと知ること能はず、たゞ察したるのみ。惟ふに、彼等のあるものは、行厨を携さへたらん。此に於てか、耶蘇の先例を見て、感激し、狂喜し、持てるものは、持たぬ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ものに分ち、之を分つや、他に厚くして、自から薄くし、則はち、道に樂しみ、情に樂しみ、滿腹悦樂して、悉とく充ち足れるとを覺えたり。

如此くして、衆の去りたる後ち、其の落ちたるを拾ひ、其のあまれるを集め、此の屑と殘肴とを感謝して、耶蘇は則はち自己の晩餐を了えたり。

如此く觀來れば、此一事實は、奇跡にあらず、眞とに人情の自然なり。耶蘇、よく喜捨の先例と神秘とを示したり。凡そ人衆合して義捐を爲さんとする時は、則はち此の例に順がはざる可らず、此の義に樂しまざる可らず。之を合同義捐の道と爲す。

動而无動靜無靜　无倚圓神未發中
愼獨玄機必於是　上天之載自融通

原是大虛月一團　怒雷陰雨甚无端
陳々西風雲霽後　原是大虛月一團

藤樹

寄書

朝鮮開導論

革堂

此篇の記者何人たるを知らず、遠く秋田より郵送して、號して〇〇生と云へり。本文によりて察するに、久しく朝鮮にあり、深く其の開導に任じて、多年計畫せるものあるが如し。所論、警拔、慨然として迫まらず。近時朝鮮を論ずるもの丶中、稀に見るの卓識なりとす。左の附言に依れば、もと「評論」に對して寄せられたるもの丶如しと雖ども、本月の評論既に出で丶、來月を待つに耐えず、目今の世論に益する所ろ多からんとて、則はち早く本誌上に掲載せしむ。附言に曰く、

炎を避けこの山中に來り淹留歸るを忘る、初嵐露ふきさはすころにも相成候はゞ歸京いたすべく思ふ、未見の知己私淑の後進、京にかへりたりさて、塵中にうづもれてもさより進んで干すの勇あるにあらず、只夫れ王子の村は在り、夕陽の西、一路東よりし一路西よりするのさころ、馬馬さ相逢ふこさもあらば相見て相語るに及ばざるも軒昂意氣洒々眉目われその君たるを知る。

山下翁侍史　〇〇拜

改革といひ、獨立といふ、余輩單に其の字面を瞥見するも、尙眼明を覺ふ、況んや朝鮮に於けるをや、

朝鮮の改革、余輩のこれを喜慶する、決して他に讓らず、朝鮮の獨立、吾人のこれに抃賀する、恐らくは他人に一籌を贏し得ん、何となれば、朝鮮は余輩の久しく志を屬したるの地にして、孤身これに投し、これが爲めに窮し、これが爲めに達し、或はこれが爲めに万死の境に臨めるの地、即ち余輩の朝鮮のために計るものは未た曾つて他人の後に落ちざるを期する所以なり、

事を推斷するは易くして、其の肯綮に中るは則ち難し、何ぞや、事實の詳悉し易からずして、これを悉すの精否は、即ち之れを斷じて當を得ると然らざる所以なればなり、邦人の朝鮮のことをいふもの、其の揣摩するところ吾人の意に適するなきは、實にこれかためなり、

云はく閔氏斥けらると、云はく軍國會議所成ると、云はく自主の詔を發せんとすと、卒然これを聞く、即ち朝鮮の宿弊一擧手にして、俄然洗刷、其の根據を留めざるが如し、甚しきは彼の皇帝號を用ゐんとするを聞き、喝釆措かざるものあるが如きは、本氣の沙汰と思はれざるなり、

朝鮮の衰頽腐蝕、奄々以て今日に至れるものは、決して一二權貴失政の罪に非さるなり、政治は社會の反映と、この理や我邦三尺童子も既に口に唱へて筆に和するところ、而して獨り朝鮮を論するに、この理を應用する莫きは何ぞや、朝鮮民心の腐敗、民俗の墜落、目これを視るときは、耳これを聞くに百倍するものあり、これ啻に尋常百姓をいふに非すして、彼の邦縉紳貴族みな然らざるなし、啻に縉紳貴族の然るのみならす、所謂開化黨、所謂日本組、亦みな然らざるなし、彼邦全土を擧げ僅々一二人を除く外、稍愛國の實ありと思はるるものを覓め得べからず、

余輩曾つて大院君と一事を計議するや、君一日慷慨余に語りて云はく、敝邦今日の急は、人々廉恥の心あらしむるに如くはなし、人々義方を知る、國亦自ら立つと、この語や、よく症に對するもの、余輩の固朝鮮のために計らんとするもの、亦これのみ、

且夫れ朝鮮獨立、支那に在りては最下策、而して日本に在りては最上策たり、朝鮮既に獨立せしめざるべからず、而して

朝鮮の獨立は、支那の忌む所、即ち日本たるもの、朝鮮をして政治上に獨立せしむると共に、思想上支那に對して反抗亭立するの力を與へざるべからず、朝鮮人は、政治上に於ては固より自國の自主を信ず、その支那に屈從するは、全く思想上の關係に屬し、孔孟の道に於て本山なりとして、これに敬事するもの、而して支那は全く羅馬法皇を以て居る、

朝鮮をして改革せしめんと欲せば、朝鮮の人民をして、改革を欲するの希望を抱かしめざるべからず、朝鮮をして獨立せしめんと欲せば、亦宜しく朝鮮の人心をして獨立を愛好するを知らしめざるべからざるなり、この言や、平々に似、凡々に似、迂に似、陳に似、而して至理實に此に在るを疑はず、

朝鮮人民たるもの依然として其の舊想を脱するなくして、而して其の所謂改革、所謂獨立なるものを全たからしめんと欲す、是れ砂上屋を築くのみ、玉均何者、一の輕猥の狡見のみ、大院君の力量人物固より玉均輩の比に非ずと雖も、其の心術、希望亦固取るに足るなし、

『註』大院君の傳は、余曾つてこれを東邦協會報告中に記述せり、參看すべし、

今即ちこれ等の一二人を把りて、藥籠中のものとなす、以て一時の利を制すべしと雖も、遂に根底に交渉なし、其改革、其獨立、みな固空中の樓閣のみ、槿花一朝の觀のみ、朝鮮をして改革せしめ、朝鮮をして獨立せしめんと欲せば、必ずや先づ其の人民を開導せざるべからず、人民をして心より改革を企望し、人民をして精神より獨立を欲願せしむるに至らずんば、其の目的を達する能はざるなり、

余輩文士に非ず、平生世の文士が筆舌にするところに於て與かり聞かざるところのもの甚だ多し、昨者『評論』を閲し、其の日本人海外傳道論に於て、三たび反覆す、余輩曾つて井上伯が、本願寺をして二十万金を拋つて朝鮮に於ける佛教大本山の地位を買はしめんとしたりしを知る、佛教中に含有する眞理の固より尊むべきに係はらず、其の現狀に於て、改革、若くは獨立等の事業精神に於て渉るところなきを見ば、この策の成敗は余輩の痛痒を感ぜざるところ、只夫れ基督教傳道に於ては即ち全くこれに反するものあり、是れ余輩の一言を呈する所以なり、

我東海日出之國に在りては、假令宗教思想に於て欠乏絶無の

徒と雖も、時々の問題は、皇室に對し奉る國民義務の念を刺衝し、吾人をして國を忘れ、公に奉ずるを忘るゝに至らしめず、朝鮮の如きは然らず、所謂易姓革命の國にして、民の王室を見ること逆旅の旅客に對するが如し、茶代の厚薄によりて、待遇あり、彼等君臣の間に於て、既に何等の情義あるなし、彼邦に在りては家族の外盡く異類なり、何の仁愛あらむ、何の義侠あらむ、其の家を經し、其の身を營す、即ち天の理を盡くして、人の道終はれりとなすもの、彼等の所信寔に如此、人或は彼邦の儒教國なるを以て、其の四維五常尚存するものあるを疑はむ、然れども是れ我邦の儒教を以て彼れを忖るの誤りのみ、我邦の儒教は言ふまでもなく日本化したるもの、儒教の彼邦に在る、其の賤陋、我邦の禁咒祈禱を事とする下等神道と撰ぶなきのみ、

聞く後藤伯三十万金を擁し、海に航して朝鮮國王の顧問たらんとするの志ありと、余輩は本願寺の朝鮮大本山たらんとするが如く、其の仕掛の不相變尨大なるを感ず、しかも是等の擧の朝鮮人民の榮枯、朝鮮同胞蒼生の盛衰と何等の干渉あるかを疑はずんばあらず、夫れ幣制の改良は大阪の市井小人某尙これをよくすべし、鐵道の經營、電信の架設彼邦亦これをなし遂ぐるの才人なきに非ず、改革條議は竹添進一郎も曾つて之れを献じたりき、嗚呼於戲、吾人の所謂革新といひ、獨立といふもの、豈この間に在らんや、

書架

○美妙及紅葉

早稲田文學第六十八、九の兩號に於て、先づ美妙及び紅葉に對する批評を讀みたり。宙外生とは、何人ぞ。學植精識、近來稀れに見るの器たり。恐らくは、文壇の新才子か。美妙を評して、其の同情うすきを歎じ、紅葉を評して、其の人生の神髓に徹底すると深からざるを斷言するが如き、能く嚴として公なると共に、未曾て他の數多の長を看取するとを惜しまず。毫も愛憎の念なくして、只管ら小說界の代表者を研究せんとするの誠意、尤も多しとすべし。紅葉を評する中に、故に通常實驗し得べき種類の人物には、性格の一致ありて

能く活動し、又た外相にほの見ゆる人心の描寫景物の美等は能く眞を傳へたれども、是に反して容易に實驗し得べからざる種類の人物に至りては、性格の一致を失なひ或る概念の團躰となれり。而して筆若し人心の奥妙なる邊に及ぶ時には、忽ち描寫するを止めて簡潔なる敘述をなすを例とせるも自然なるべし。此の事物の外相に眼光の限らるゝ點のみを言はゞ、ほゞ美妙に相似たり。されども甚しく異なる所ろ一面にあり。美妙には全く同感の欠けたりしも、紅葉はよく深遠の所を見ざる迄も其見る所には充分の同感をなし得るが故に、其の範圍に於ては能く隱微を穿ち能く活動を與へたり。

此の一節、來者何人も動かし能はざるの定論なり。

〇園照夫人と妾との關係

蓋し、ミス、マクリーンが其の知人朋友間に配布したるものなるべし。「園照と妾との關係の梗概」と題したる英文二十頁の小冊子、吾輩の手に落ちたり。初め園照子が、突如として自から訪ひ來りし事より、彼女に對する密かなる掛念、之につきての自からの慰さめ、漸次彼女を紹介して公けの演説に伴なひし事、其の書記となりし事、やうやく寄附金のありし事、寄宿所を世話せし事、入金記載の明白ならぬを忠告せし事、園照子が俄然として樣姿の變わりし事、之が書記を謝絶する旨を直ちに告げし事などを精細に記述し、最後に其手にて周旋せし寄附金の確實なる表を製して園照子の報告と相違する所あるを示したり。中に云はく、

妾は園照に告げたりき、御身もしゼヲヂ、ミウレルの如く神を信じて一任し、而して其賜ふ所ろを得たりとせば、そは御身また彼の如く之に王たるを得べし。然れど、御身は、其金を獲んとを人に對して要むるにあらずや、然れば、御身の潔白を示すべき最良の方法として、其の寄附金の爲に信用ある日本信徒の中より保管人を備えざる可らず、と言ひしに、彼女はどうして〳〵（ネバー、ネバー）と答へたり。

初め彼女が到來せし時、其の學校建築の爲に、亞米利加にて六百磅を集めたり、當英國にて更に六百磅を集めたしと言へり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

彼女の爲に思ふ多くの友人等も、其の自叙傳には、事實にあらざる如く見ゆるもの多くあり、强ひて廣ろく賣らぬ方宜しからんと言ひたり。
などの文あり。全躰の記事、何如にも謹愼忠實にして、敢て他を貶するヿをせず、但だ已むヿを得ず、自己の義を保護するの趣見はれたり。

○外國宣敎師論

思ふヿ明斷にして、言ふヿ斷然たる浮田和民君は、明らかに外國宣敎師論を公けにしたり。曰く、

外國宣敎師中福音の眞意を知る者幾人かある。天啓の福音とは何ぞや、彼輩は之を天上より落來る郵便の如く思惟せり。罪惡とは何ぞや、是れ人心に堆積せる先天後天の染汚にして恰かも一個の實物の如くに會得せり。天國とは何ぞや、受洗して敎會に入る是れ則ち現世の天國、死して后ち樂土に赴く、是れ則はち來世の天國なりと言へり。其他、宣敎師の所云る永生と言ひ、奇跡と言ひ、眞神と云ひ、又た三位一躰と云ふもの、一として實物に非ざるは無く、其解釋一として唯物說に非ざるは莫し。

彼の外國宣敎師最とも唯物論を惡む、而して自ら唯物論者なるを知らず、彼れ最とも偶像敎を厭ふ、而して自ら一種の偶像敎徒たるを悟らず、彼れ最とも無神論を恐る、而して未だ無神論の何たるを解せず。

嗚呼これ豈に唯だ外國宣敎師のみならんや、多數の日本宣敎師亦た然るヿなき乎。世上、今や如此き論ありて、而して倘ほ左程に新奇なるヿを覺えざるに至れり。敎界大勢の一變せんヿもとより遠きにあらず。

○今回の交戰を義とす

"Justification for the Korean War" 實に是れ外字新聞帋上に、內村鑑三君が、熱烈の言調を轟かすに恰好の題目なり。君、近日のジヤパン、メールに書を投じて、着々今回の義戰につきて辯論す。其の慨切するに至ては、則はち曰く、

亞米利加をして此戰を評せしめよ。就中、其の淸敎徒の祖先たち。ウイリアム、ペン。ロード、バルチモア。リンコルン。サムナーたちの精神をして此戰を評せしめよ

又、英吉利をして評せしめよ。就中、其のサイモン、デモントフホルト。ハムプデン。クロムエル。清敎徒の聖人。ウイルバーフホース。コブデン。ブライト、其他すべて公義と自由とを愛するもの等をして、此戰を評せしめよ。

又、佛蘭西をして評せしめよ。就中、其のラフエーラ。ミラボー。コリグニー。ヒウゲノートの面々。近世のビクトル、ユゴ。其他すべて專制を厭忌する勳爵士的の人々をして、此戰を評せしめよ。

又、日耳曼をして均しきとを爲さしめよ。其のルーテル。其のレッシング。其のシルレル。万古死せざるゲーテ。其のライン河上の番卒。等をして此戰を評せしめよ。

又、伊太利亞をして同じきとを爲さしめよ。其のダンテ、其のサボナローラ。其のリエンヂ。ブレシアのアーノルド。ガリバルヂ。ビクトル、エムマニウエル等をして評せしめよ。

彼等は、皆な此義戰に同意すべし。皆な之に加擔すべし。皆な大日本の勝利を獲るとを熱望すべし。

論説

嬰兒の精神及び其發達（其六）

竹内楠三

前回に於て論じたる如き遺傳的感情の種類尙ほ多しと雖ども、一々之を列擧するときは長きに過ぐるの恐あるを以て、以上述べたる數例に止めおき、是より他の精神現象にうつりて少しく論ずるところあらんとす。蓋し讀者は既に說明したる數例により、遺傳的感情とは如何なるものなるかを畧ぼ理會せられしならんと信ず。

第六　注意

嬰兒に於ける注意の發達は敎育上特に研究すべき價値を有する問題なれば、本論の一部として之を畧述することゝなし、先づ注意とは如何なる精神活動なるかを說き、然るのち此れが發達の狀態を記さんとす。抑も注意と云へば、恰かも吾人が或は花を眺めんとして之れに目を傾け、或は菓をとらんとして之れに手を伸ぶる如く、無形の精神が自ら己れの能力を何か觀察せんとする事物に向てさしむくるものゝやう思はるれど、精細に之を研究するときは決してさるものにあらず。夫れ吾人の腦中には精神と稱する分解すべからざる一躰ありて存し、種々の能力を有して或は外物に感應し、或は比較判斷し、或は思慮決意するものなりとは舊心理學者の想像なりしが、斯る想像によれば注意とは精神が自ら己れを或ものに

さしむくることとゝ解するを得れども、近來の科學的研究によれば精神とは分解すべからざる一躰にあらずして寧ろ厖雜なる元素、即ち微細なる感應の結合によりて生じたる觀念の群集にして、此等の觀念は恰かも水の流るゝ如く絶えず新陳代謝して瞬時も常住なるものにあらずとなすを以て、隨て注意と稱する現象に對する見解も自ら異ならざるを得ず。斯く新陳代謝する種々異類の觀念中その識に現はるゝ度に差異ありて或ものは明かに、或ものは不明なるなり。又たその識內に存する時間に長短ありて、暫時にして識を去るものあり、或は比較的に長く識に存するものあるなり。然り而して或觀念或は感覺が最も明かに識に現はれて比較的に長く識內に留まる有樣を名けて注意と稱す。譬へば識は限られたる空間の如く、觀念或は感覺は其空間に於て運動する物躰の如し。或物躰が空間の中心に位置を占むる如く、或觀念が識の中心即ち識の最も明かなる點に入り來るとを注意と云ふなり。然りと雖ども玆に少しく區別を要する點あり、即ち物理學上に所謂限られたる空間に在ては其內に運動する物躰の多少或は有無に係らずして、其廣がりは常に一定不變なり、されど識と觀念との關係に於ては然らず、識と稱する何時も變ぜざるものありて其內に觀念入り來りて活動するにあらず、識は觀念の活動と同時に觀念互ひの關係より生ずるものにして、觀念の變化と共に多少變化するなり。故に精密に云ふときは注意とは或觀念或は感覺が最も明かなる識を比較的に長く有する有樣を云ふなり。通常注意を區別して二となし、一を他働的或は無意的注意と名け、他の一を自働的或は有意的注意と名づく。例へば嬰兒が美麗なる花に目を奪はるゝ如き、或は不意の物音に耳をそばだつる如きは前者の例にして、成長したる小見が書物の意義を考へ、或は自ら過去の行爲を反省する如き場合は后者の例なり。然れども此區別は單に精神現象の簡單なる場合と複雜なる場合とより起りたるものにして、通常人の想像する如く、其性質の相異より起りたる差別にあらず。複雜なる注意とは種々なる觀念の同伴及び競爭の場合に於て起る現象なり。故に余は注意を區別して他働的と自働的となすよりも、若し强ひて區別せんとせば、簡單なる注意と複雜なる注意となす方一層科學的ならんと信ず。

凡て嬰兒期に於て精神現象の現はるゝや甚だ簡單なるものにて、複雜なる現象は此等の漸次分化するによりて起るなり。されば注意に於ても亦た同樣にして嬰兒の注意と稱すべきものは甚だ簡單にして、將來發達せんとする複雜なる注意の萠芽なり。蓋し嬰兒に在ては複雜なる注意の起るべき事情未だ備はらざるによるものなるべし。此時期に於ける注意は單に外界より來る種々の刺戟中或ものが最も明晰なる感覺となりて他の刺戟が明かなる識を有せんとするを妨ぐるに過ぎず。然り而して腦中に强き觀念の活動あるや、此活動は自ら動神經の中中樞を刺戟して之れと連續せる筋肉の收縮を起し、或は顔面の變化となり、或は眼球手足等の運動となる、是れ一般の觀念活動に於ける通則なり。故に或刺戟が嬰兒の腦中に於て最も明晰なる感覺とするや、直ちに一定の反射運動を起して、或は眼球の運動を止むることとあり、或は頸を動かすことあるものとす。是れ余が既に本論の第二回に於て說きたる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

如く嬰兒は生后の經驗を待たずして、其神經系統中に幾分か先天的結合を有するによるものなり。斯の如き先天的結合あるを以て外界より來る刺戟は感神經を傳はり腦に達して感覺となり、直ちに一定の線路を通りて外界に反射して表出となる。吾人は嬰兒が斯の如き表出を現はすによりて或刺戟が腦中に於て明晰なる感覺、即ち注意と稱する狀態となりしか然らざるかを觀察し得るものなり。

簡單なる注意は嬰兒の出生后幾ばくもなくして現はるものにして、例へば生后僅かに數日を經過したる嬰兒の目前に於て燭火を左右に動かすときは、嬰兒の眼球は燭火の運動する方向に從ひて左右に運動す。斯る例は注意の萌芽とも云ふべきものなり。又た稍々進步したる注意の例を擧げんに、プレー氏曰く「余は一ヶ月を經過したる一嬰兒が絕えず己れが乳を吸引する作用に確かに注意せしことを知れり。是れ嬰兒の眼が快樂を以て爍き、又た間々眼瞼の下に半ば覆はるゝなどの表出によりて明かなり。然るに彼れが常に牛乳を飮む所の罎は一日砂糖水を以て充たされしが、數滴之を吸ひたる后忽ち吸引を止め、三秒間を經て再び吸ひ始め、而して恰かも罎中には通常の牛乳あるが如き滿足の表出を以て吸引を續けたり。之れに反して砂糖を交へざる清水は同樣なる結果を現はすものにあらず、嬰兒は最初一口之を吸ふや直ちに吸引を止め、五六秒間の后再び罎に向ひつれども、直ちに甚と意味ありげなる皺面及び尖唇の表出を以て之を避けたり。是れ吾人に味感に於ける嬰兒の注意を示すものなり」と。又た氏は觸感が注意の狀態を得ることに就き記して曰く「生后第一ヶ月間に於ては躰器の自動的或は有識的なる種々の運動甚だ拙劣にして漠然不定なり、故に此等の運動は余をして確かに注意の影響が觸感に及ぶことを認知せしむるに適せざりし。されど此時期に於ける注意は矢張り此の如く漠然たる有樣にあるものならざるべからず。然るに六週間を經過したる一嬰兒の手がその母の胸、顏面及び手に觸れしとき、彼れが双眼の欣然たる表出幷に開きたる口は、倂ひ此等の觸感は漠然たるにもせよ、之を繼續するの快きことを示せるものなり。而して此嬰兒は二ヶ月と六日を經過したるとき、明確なる有意的注意（複雜なる注意）を以て、その母の胸及顏に觸れ又た其指を握りしものゝ如し。又た同時期に於て其母が嬰兒の目前二デシメートルの距離に於て己れの胸部を開きしに彼れは忽ち之れて向て其手を伸ばすに至れり」と。又た視感が始めて注意の狀態となることにつきプレー氏が觀察したる事實に曰く「余は生后二十八日なる一小女及び三十五日なる一男子が彼等を養ふ所の牛乳罎を見しとき、其眼球の凝止及び唇の運動によりて、彼等が牛乳罎を認識せしこと及び其注意を之れにむけ得ることを現はせし事實を目擊したり。又た生后一ヶ月なる一嬰兒は窓に近き机上に於て動搖せる光線の反射を三四分間凝視せしものゝ如し。又た余は彼が四十五日にして其目前一ヤード餘の距離に於て、一小女が弄べる所の淺青色に飾れる人形の運動に從ひて其目を動かせしことを見たり。而して尙五日を經過したるとき、彼れが或方向に於て其目を凝止せしことは其注意が白、靑或は紫なる物躰に凝聚せしことを示せり。されど他の色は未だ彼れに無感覺なるものゝ如く見

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

えたり。然るに彼は出生より第二ヶ月にして赤色に注意するに至りたれども、黑、鳶色、黃色などには尙ほ無感覺なりしものゝ如し。」と。又た氏の說によれば、嬰兒が音響に注意するに至るは生后四週間なるものゝ如し。チーデマン氏が其男子を觀察したる所によれば、生后十五日にして氏が嬰兒は彼れに話しかくる所の人々の身振に注意し、而して彼等の言葉は能く嬰兒の淚を呼び起し或は之を止めたりと云ふ。又たプレー氏の觀に曰く「余は生后一ヶ月と二日なる一嬰兒の左側にありて、高聲に話しつゝありしが、彼れの頭は左方に向ひ又た其目は余を凝視するに至りしことは彼れが幾分か余の音聲に注意せしことを表出せり。一ヶ月半なる一女子二種の異りたる泣き聲を以て苦痛と食物の願望を區別して表出せしものゝ如し。而して此小女が生后二ヶ月になれるときは、其淚が苦痛、願望、憤怒の何れを意味するかを辨別するに毫も困難なかりし。又た生后六週間を經たる一嬰兒ありしが、ヴァイオリンの音を聞けば、母の膝に於て何時も躍りあがるに至れり。又た彼れが出生より二ヶ月を經たるとき、犬の聲を聞けば忽ち其眉をひそめ、唇を括し以て泣き出すに至れり、然るに此犬が愛撫さるゝに從ひ、其吠聲を媚ぶる所の聲と變ぜしかば、彼は若た注意して之を聞き、漸次之を怖れざるに至たるのみならず却て其聲を樂しむことゝなれり」と。

以上プレー氏の觀察したる數例によりて自から明らかなる如く、嬰兒の初期に於て發現する注意は甚はだ簡單なるものにして、凡て外感によりて起るものに外ならず。而して嬰兒の腦髓は甚だ軟柔にして長く同一の刺戟に堪ゆる能はざると、

又た一は腦髓の組織甚だ簡單にして、一種の感覺起るも之れに同伴して現はる觀念の數甚だ僅少なれば、一の感覺或は觀念が長く注意の有樣、即ち識の焦點に留まること少きものなり。然るに嬰兒が漸次經驗を積むに從ひ種々の感覺相集まりて複雜なる觀念となりて腦中に潛伏し、此等の觀念亦た互に相關係して識內に再現するに至る。斯く腦中に多くの觀念を蓄積するに至れば、此等の觀念は殆ど外界の關係を脫し、同伴の法則によりて自由に新陳代謝することゝなる。是れフェフデンク氏の所謂觀念の自由なる流なり。是に於て此等の觀念は其力の多少により互に競爭を生じ、强は弱を制して識外に退け獨り識の中心を占めんとすることあり。或は自ら左程强き力を有せざるも已れと結合せる他の多くの觀念の助けによりて、識の中心に長く止まり得る如き觀念あり、之れ恰かも自ら左程の金力もなく、學力もなく、また天才を有せざれども、社會に交際廣く且つ人望ある人は、他人の力に推されて社會に高等なる位置を保ち、而して他を制御し得るものなるが如し。斯の如き狀態は種々の經驗を重ね、腦の組織複雜にして、然かも豁然となりたる時にあらざれば現はるゝものにあらず。之れ即ち最も複雜なる注意にして所謂發達したる有意的注意に當り、或は自覺的注意或は自制的注意とも云ふべきものならん。學者が抽象的の道理を沈思精想する如きは即ち其一例なり。

抑も注意と稱する狀態は精神の發達上に於て最も必要なる事情なり。吾人は絕えず外界より無數の刺戟を受けつゝあるものにして、其刺戟の中左程明かならぬ識的現象となりて忽

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ち滅するものあり、又た全く識に現はれざるものあり。然り而して刺戟が吾人の精神の一部となるに至るは、是非一たび識の焦點に來らざるべからず。換言せば注意と稱する狀態を取らざるべからず。若し然らざるときは如何に多くの刺戟あるも吾人が精神界の一部となること能はざるなり。例へば吾人は熱心に讀書する際、傍より人に話しかけられ、其音響は充分耳に入るも全くこれに就て無識なる如き塲合あり。又た市街を通行するに當り種々の外物吾人の目に觸れ、其時に於ては各一の觀念となりて識に現はるゝも、其觀念は甚だ漠然たるものにして、精密なる點を明かに知覺したるにあらず、故に暫らく識に現はるゝも忽ちにして消滅し再び之を回想することなし。是れ注意の狀態を得ざればなり。されば何物にても精細に知覺し、且之を精神界の一分子として長く腦中に保存し置かんとするには、外物より來る感覺を是非とも一たび注意と稱する狀態に置かざるべからず。然るに注意の感覺をして注意の狀態を得しめんには如何にしてよきかとの問題は甚だ困難なるものなり。此方法として最も重要なる事情の數個を擧ぐれば、（一）健全活潑なる腦、（二）適當なる强度の刺戟、（三）刺戟の變化、（四）關係せる觀念の補助、（五）妨害となる刺戟の減少等の如きものなるべし。是等の事情を都合よく備ふるときは敎育上に著しき利益あるものにして、精神の開發甚だ迅速なるべし。然りと雖ども嬰兒の腦髓は未だ幼稚にして甚だ軟柔なるものなれば、長く一物に就て注意の狀態を繼續せんとするは決して出來べからざるのみならず、又た刺戟を屢々變化するも注意を永續せしめんとするは甚だ困難なり。而して强ひて之をなさしめんとするときは大に腦の發達を害するものなれば、育兒の任にあるもの能く注意せざるべからず。

つれぐ草

○人相ひ評するを聽く

停吟行人

◎斷えず人を怨んで不平勃々たる者よ。試ろみに問はん、汝、一人にても心を許して身を托せんとするの友ありや。汝は曰はんとす、世に知己なしと。左れど、汝に問はん、抑そも汝が知り、汝が尊とみて、仕へんとするの長者はありやと。汝は曰はんとす、一人もなしと。噫、あはれむべし、此種の人。自から知らんとせずして、人に知られんとを欲し、自から許さんとせずして、人の許さんとを欲す、喩えば戶を閉ぢて光明を入んとし、自から暗くして人に知られんとするが如し。怨嗟、終身止むとなけん、不平一生斷つとなけん。

◎嗚呼、今人の相ひ信ぜざると、一に何んぞ如此く太甚しき

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

や。慷慨は、誤解とせられ、至誠は無經驗とせられ、圓滿は僞善とせられ、修德は虚飾とせらる。人たゞ欺むかれざらんとし、互ひに眼を圓らにして窺がふ。欺むかれたるは、罪なりと思ふか、何んぞ兢々として恐るゝとの切りなるや。到る所ろ、不平不信の聲あり、到る所ろ、誹謗罵詈の聲あり。互ひに問もに他を誹謗したるものは、必らずしも意氣の投合したるものにあらず。彼等も相別るれば亦た互ひに誹るのみ。罵倒には合力し、賞揚には反抗す。其崇むる所ろのものは、僅かに關係なく利害なき古人に在るのみ。一と度び相知り相接する所ろのものに及べば、毀たずんば休まず。

◎輕淺嫉忌の聲にして、太甚しく今人を賞揚崇拜するものあり。如此く崇拜せらるゝものは、幾多の中傷妨害にあひて而して后ち超脱し、既に卓然として、凡衆の及びがたき地位に達したるものと知るべし。勢ひ既に斯の如くなれば、凡衆は最早や之と爭そひがたきとを知る、故に只だ之に倚らんとするも、之を害なはんとせず。ひとしく是れ同一の卑劣なるのみ。

夕涼み　豆子

（一）

夕風すごき　雲のいろ
月をかすめて　來つゝきつ。
木の下闇に　アナ奇怪
聞こゆ悲鳴は　何事ぞ。

（二）

醜のゑみしと　刺しちがひ
屍は異境に　臥しながら
家路をこひて　迷ひ來し
兵士どもの　怨靈か。
たちまち見ゆるもの〻影
三ッ四ッ二ッ　葉蔭より。

『待ちわびて
月みる人も　あるものを。
あはれとも知れ妻と兒の
飢にや死なん　我をしる』

（三）

『七日夜ごしの　なが雨に
たづきの業の　なく〳〵も
劔をとりて　今宵こそ
人をおそひて　その飢を……』

（四）

飢なばうゑよ　刺さばさせ
月に飽かまし　われはたゞ。
うちてはらへばくれなゐの
血汐とめけり　夏のむし。

勇士最期の手帋

（上）

賤子譯

頃は卅餘年前、米國南北戰爭の眞最中でした。北合衆國のさる農家に、今しがた到着の電報を前に置いて、物語る二人の老人が有升た。五十格好と思しき此家の主人は、教會の牧師と見ゆる合手にかふ申て居り升たが、愁嘆は言葉の外に溢れて居り升た。

イヤ、アレン教師、うちのベンを志願兵に出した時に、此廣い合衆國、息子を徵兵に出した親御も澤山ある中に、わしほど大切な持物を義捐したのは無いと思ひやしたナ、實もつて一人もなからふと思ひやした。居睡りィして殺されるつていふンだが、大したことァ子ィ、本のチヨイトやつたにちげいねい、あれに限つて、何の横着で居睡りなんぞするもんで。大事な務めィ措いて、何んで、おめへさま、物チい

ひつかつたつちや、あれほどハキ／＼して、頼み甲斐のある奴はねいんでがすから、ハア。何でも、時計でセコンドいくつッていふほど、チヨイト粗匆にやつたもんでがせう。まだあの年で、極く丈夫でいんじや、があせんからナ、丈こそわしらほどがすが、年はたつた十八でがすもの。それで番兵の務ィめしてながら、居睡りィしてたつて、銃殺されんでがすと……ドレ／＼電報に何としてありやしたつけ、「廿四時間内に」たつた廿四時間……それじやァおめへさま、ベンは今ごろどふなつて居やせう？

天國に御座る父様がお引とりになつたらう、

アレン教師は慰め兼て申升た。

さうでありやせう、神様のお慈悲は格別でがす。ベンの奴がいひやしたつけ、「とつさん／＼」腕ィ大威張に持あげてわしに見せやしてナ、「とつさん、おらァ、お國の御用に立つ時、此大腕ィつかあなかつたつちつちや、一人前になつてから恥かしいナ。さういひやすもんで、わしも、「それじや、おめへ行つて來な、神様も見て御座つて守りになつて下さるもんだからつてナ、さういひやしたんだ。アレン教師の前ですが、矢張り、神さまの守りは有つたもんでがせうナ、なかつた譯はがすまい。

老人の言葉は聊か澀む節があり升た。道理上さう信じながら、情に於いて疑がふかの様に。

ヲーウェンさん、それを疑ひなすつちやいけない、それこそ大切に守つて下さるに相違ないから。

傍らに居つて、此問答を聞くブラソムはいよ／＼顔の色を變へ升た。志かし涙とては一滴もこぼさず、心に餘る苦痛を外に現しませんかつたので、格別其様子に氣をつける人も有ませんかつた。物もいはずに、何かと家の用事に心を配つて居升たが、今勝手口に音なふ人があるので、行つて見升と、隣の人が一封の手紙を屆けるのでした。

兄さんからだ！

と一聲漸く洩し升た。此一封こそ此場合に死人から來た便り同様でした。ヲーウェンは手紙を手には取り升たが指が戰へて、封を切るとが出來ませんかつた。それ故、意氣地ない子供の様に、アレン教師へ渡し升た。教師は開いて、さの如く

讀みあげ升た。

此手紙御手元へ到着いたし候頃には、私ことは最早永遠界の住民と相成居候はん。最初はいかにも恐怖の至りに存じ候ひしが、段々考へ居り候中に、恐るゝことはなくなり申候。其場合に、縛りもせず、眼匿くしも打たず、切めて大丈夫の最期を遂げさせやらんと申呉候。兼て父上に御約束申せし通り、御國の爲、戰場の死は厭ひ申さず、花々敷決戰いたし候時ならば、聊か生命は惜しく存じ不申候へども、御國は敵に賣ることにもならんとする失策の爲に、犬の如くに銃殺いたされ候こと、義務を怠り候爲に死ぬると申こと、其口惜しさ計りにても、命を致さぬが不思議に御座候。併しかく相成候には深き仔細の有之候なれば、さまで父上に恥辱を負はせ奉らざることと信じ候。事の始末を逐一こゝに認め候間、私無き人の數に入り候節、何卒朋輩の人々に御傳へ被下度伏して願上候。此期に及んで、私の口よりは何とも辨解致すま敷候。

御承知下され候通り、ヂェミ、カーのことは萬事氣をつけ、世話致し候旨母御へ約束いたし置候。されば、ヂェミどの病氣に罹られ候節、及ずながら爲に盡力いたし申候。隊へ呼び戻され玉ひし折には未だ健全に服されず、彼のことの有之候前日などには、我が荷を背負ひ候上に、ヂェミどのゝ分をも引うけ進行いたし申候。夜に入つては、「かけ足」の號令ありて、私肩の荷物は隨分と重く相成候ひしが、さりとて、疲勞は誰も同じことに有之候ひき。ヂェミどののは殊に弱られ、折々腕を貸して上ねば路傍に倒れらるゝ程に候ひき。思へば陣營に着いたし候折は、私こと非常に疲れ居り候ひき。全躰ヂェミどのが番卒に廻られ候筈なりしが、私ことわざと代りを勤め申候。然るに餘りに疲れたりと見へて殘念にも一向知らぬ間に此始末に立至り申候。其場合には、たとひ、頭に筒先を向けられ候とも、眼を醒し居候こと、六ケ敷かりしならんと考へ候。

ヂーウェンは此時恭しく、

それと聞いて、何より有難い、ベンに限つて横着に居睡る奴とは思わなかつた！

今日に相成候て、暫時暇を遣す故、宅へ手紙を認めよと大長より深切なる許可有之候。父上には決して大長を恨み

玉ふ可らず、ヂェミどのに對しても、悪意を懷き玉はぬ樣くれ〴〵も願上候。大長には單に義務を果され候譯にて、ヂェミどのは悲歎にくれられ、是非私の代りに死に度しとて只管歎願いたされ候。

母上のと、妹ブラサムどのゝと何より思ふに忍びず候。父上には何卒兩人を御慰め下され度候。私とは雄夫の最期を遂げ候に付、今こそ世間へ對し恥しく思はれ候はんが、戰爭終りて萬事明らかに相成候節は、今の恥も悉く雪がれ候へば、其れを一ッの樂しみに被致候樣御申傳へ被下度候。心迫りて、堪へ難き情有之候此上神の祐助を祈る外無之候。父上さらば御暇申上候。

今夕もたそがれ前牛の牧場より歸り來る頃、ブラサムどのいつもの如く、勝手口に立ちて、兄の歸へる日を指折りて待るゝならん、されど兄はいつまで待るゝも歸る日はある間敷候。終に御全家に御神の祝福を祈申候。憐む可き不孝の兒を偏に赦るし玉へ

ベン拜

父上様

時報

○皇子輝仁親王殿下の薨去　滿宮輝仁親王殿下御不例にて益々御危篤にならせ給ひ去る十七日午前零時卅五分箱根御用邸より御歸京あらせられ麻布の御殿に御着なりしが終に御療養叶はせられす同三時十分薨去遊ばさる　殿下は　今上の第四皇子にして明治廿六年十一月三十日御降誕にて御腹は園權典侍なり去る二十一日御葬送ありたり御悼はしさも申さん樣なし

◎學校、教育

○岡山の高等女學校　岡山縣の有志者は一の高等女學校を設置せんさて目下奔走中なりさ

○倚松園女塾　本紙上に屢々紹介されたる園輝子女史が麻布仲の町に校舍を新築せる由は兼れて報ぜしが今回之れを倚松園女塾さ名附け來る九月二十一日より開業する由

○函館裁縫専門女學校特別認可願　函館宮岡町なる同校々主高桑九藏氏より議に同校出身の生徒に教員の資格を與ふる事の特別認可を北海道道廳に向て出願せし處其の后道廳よりは右の旨を文部省へ申達したる由なるが遠からず認可せらるべしさ

○私立順正女學校新築の計畫　備中國上房郡高梁向町私立順正女學校職員福西シゲ子は先般來同校を新築せんさ頗る奔走せしが其結果さして京阪神三地方の有志者及び同地米國人等より八九百圓の義捐金を募集し尚ほ金一千餘圓を地方の有志者に賴り募集する都合なるが右に付此程敷地壹反三畝歩を購求したりさ

○名古屋市の女子學術講習所　名古屋市有志者の發企に成れる女子學術講習所は本邦固有の優雅貞淑なる女風を養成し兼ねて日常必須の學術技藝を講習するを以て要旨さするものなるが今回大に規摸を進めて一の高等女學校さなさんさの計畫ありさ

○中村女子手藝傳習所　高知市なる同所にては去る十二日和服裁縫科第四回特別科第五回の卒業證書授與式を執行せり

◎片々

○貞婦の賞與　山形縣東村山郡出羽村大字漆山神保倉吉養母すんは資性溫順善く舅姑に事へ殊に夫の眼病に罹るや明を失ひ生計を營む能はざること廿餘年其間舅姑に續て歿し又た夫を失ひ赤貧洗ふが如きも自ら家業を勵み傍ら子女に教育を加へて終に家名を墜さゞる志操貞實を奇特させられ木下知事より賞金貳圓五十錢を下賜されたり

○清兵本邦婦人を凌辱す　芝川天津領事が引揚の際清兵我婦人を凌辱したるとの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

詳報を記さんに去一日荒川領事は一家を引揚げて小村公使よりも前の船便にて歸朝せんさて天津居留の日本人三十八名を英國人の組織せる支那航海會社の所有船重慶號に乘船せしめたり斯くて重慶號は塘沽に在りて出船時間を待つゝありしに同夜太沽の清兵四五十人宛一隊さなり重慶號に闖入し來りて荷物を押領し金目の物を横奪し時計類の如きは大躰彼に盜み去られ拒みたる者は兵器を以て亂打し甚だしきは劔を以て負傷せしめたるあり斯る暴行を爲したる末婦人及男子十五名許りを拘引し當夜兵營に監禁して所持品を奪ひ命を拒みたる婦人杯は負傷したるもあり斯くて翌朝釋放したるも横奪物は返却せず其監禁したるは婦人多く而して其間四五時間なりさし但し荒川領事の家族は幸にして監禁の難を免れたりさ云ふ斯くて重慶號は上海に着港し同港にて小村公使一行の乘込み居りし英船通州號さ相會し一同ヤーラ號に乘り移りて歸朝したるなりさぞ（毎日新聞）

○貞婦赤鬼なつ子　は廣嶋縣奴可郡西城村赤鬼愛助の妻にして資性順良克く舅姑及び夫に事へ夫曾て惡疾に罹り終に癈疾さなるや家計益々困難に陷るさ雖も毫も屈撓せず專ら手工業に從事し獨力を以て藥餌の資に供し且能く夫の嗜好を充たしめ夙夜看護奉養到らざるなく貞節を盡す事十有八年一日の如し洵に奇特なりさて其賞さして金三圓五十錢下賜せらる

○篤志看護婦人會　同會員中伯爵夫人伊藤梅子其他重立たる貴婦人十數名は過日幹事長小松宮御息所殿下の御親諭に基き下澁谷村赤十字病院に於て消毒材料調製法及實地看護法等見習中にて日々腰辨當を以て出勤精勵し居らるゝ由

○恤兵に關する幻燈會　去る十七十八の兩日神田婦人會の催にて本郷春木町中央會堂に於て日本軍隊の露營の圖を始め戰地の實景接戰の模樣、豐島近海及成歡に於ける我兵大勝利の圖、日清兩國軍艦清韓國王の肖像海陸軍人の風彩、當事件に關係する高名なる人々の肖像、清韓都府の實景等を幻燈に映し縱覽せしめたり其收入は恤兵入資に獻納する由

○神奈川縣婦人同盟會　平野鐙堀内茂世の二氏主唱さなり日清事件に就き同情同愛の姉妹に訴へ其義捐を以て繃帶を製し在韓軍兵創痍の資に充てんさするものなり義捐者は金十錢以上晒木綿は一反以上さし九月十五日迄神奈川縣下高坐郡藤澤臺町靑年會事務所に贈附すべしさなり

○静岡高等女學校生徒の美擧　静岡市鷹匠町なる同校生徒は日清開戰に付其筋へ戰地用のメンザン糸を献納せんさて目下頻りさ製造中なる由又左の二首の歌は今年十三になる同校生徒の詠みたるものなりさ

日の本の太刀風にこそ靡くめれ
　ふせぐすべなき支那のたみ草

さき糸の最ごかよはき身ながらも
　國にぞつくすやまさなでしこ

○篤志の婦人　秋田縣平鹿淺舞なる伊勢さた子さ云へるは左の一文を添へて秋田時事新聞社に獻納方取次を依頼せりさぞ

こささへく唐國をうちさためんさ、大君のまけのまに／＼まかりつる皇御國のもの丶ふたちよ海山遠くへたゝりたる知らぬさかひにありて、露に伏し雨にかほ洗ひ給ふらむを、まして此頃は暑さへはげしくあら金の土さへさくるやうなれば、いかに苦しくわひ給ふらん、いかて慰めんすへもかなさ思ひめくらせど、女の身にしあれば心にまかせず口をしうてなんなげき渡り侍る、さるを此程御社にて彼の諸越が原なる兵士たちを慰めんさ義捐金を募らせらるゝさ承はりさ嬉しく此時そさは思へど心のまゝならん身に侍れば、餘りにいさゝかにていさ耻かしきものから金一圓まゐらせ侍る退け給はでそが中に加へさせ給はゞこよなう嬉しうなん　あなかしこ

○女人講の義擧　愛知縣羽栗郡笠松町女人講連中は日清交戰につき我軍人の勞を慰めんが爲め恤兵金献納の義を集會の席に於て一人發言したるに忽ち同意あり即座八十圓余の獻納あり尚ほ夫れより各講員を叩き勸誘する由少くも五百圓余に登るべしさ云ふ

○婦人信義會員の獻金　函館小樽港各商家婦人三十余名の組織にかゝる婦人信義會は毎月一回例會を開會して若干の積金を爲し薄命者の爲め相應の慈善金を惠興し來りしが今回日清間に開戰を布告し砲煙相見ゆるに至りたるに就ては軍資金として多少の獻金を爲さんさの議起り此程全會より金五十圓を取纒め獻納のことを議決し出願の手續に及ぶ可しさ云ふ

○宮城婦人會さ看護婦人會　今度宮城縣勝間田知事夫人本部書記官夫人等發企さなり宮城婦人會を起さるゝ由其目的は將來純正なる一の女學校を設立するに在りて淑德の婦女子を造成するに力めらるゝものなりさ又た久しく休會の姿さなり居たる同地の看護婦人會は木村衛戍病院長夫人等主唱さなりて此際再興せしめんさ目下協議中の由

○笠原光雄の細心　笠原光雄は西尾藩士なり性武を好む嘗て江川太郎左衛門の門にあり後ち藩政に從事し額田縣の新設に至りて罷む博愛社の創立に及び舊西尾藩主今の子爵松平乘承幹事の任に當る光雄即ち出て之れを助け斡旋最も力む光雄人さ爲り篤實實踐躬行只その逮はさらんこさを恐る其の考案さ云ひ其の規畫さ云ひ緻密にして周到而して一點の私なし居常素朴に甘ゞ衣食住に於て未た曾て其の本分を失はず博愛社の日本赤十字社さ改稱するや其の博愛の博愛たる名實を全ふするに由るさ雖ども其の盛大を致すの源因を問へば光雄の力その多きに居るさいはざるべからず佐野常民は赤十字社に長たり而して光雄を信任し委する所多し光雄孜孜切切未た一日も其の職を忽にせしこさあらざるなり赤十字社は實に民設の事業にして而して歐洲赤十字社さ聯絡し其の關係や廣し大なり之れか董事の責に任ずるもの其の人を得ざるべからず光雄は眞に適任の士なり宜へなり其の旭日の勢あるこさを今日都鄙に論なく民設の事業少なきに非ず之れに役員たる者は概ね機敏の才子なり是れ其の忽ち起りて忽ち仆るゝ所以なり細心光雄の如き獨り赤十字社に第一の人たるのみならず社會上儀表すべきの人なり吾れ豈に推賞せさるを得むや
（精美三十二號による）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

薔薇一枝

七峰生

赤貧洗ふが如き窮境に處して、能く守るに其道を以てし、修するに其德を以てし、恰も岬頭の燈臺の如く、茶溪橋畔女子高等師範學校に赫灼たりし高木光子は、今や女子教育の大任を負うて、山梨縣甲府高等女學校に赴きぬ。光子女史は其れ如何なる人にして、將來幾許の功を擧ぐへきかは、女史が今日までの經歷を以て略ぼ想定するを得んか。

女史は一商家の女なり。父を利兵衞と呼ぶ。茶業を營むと雖も、家甚たゆたかならず。かつて二男三女を擧ぐ、女史は其長女明治七年二月千住中組に生る。六才にして淺草待乳山小學校へ入學し、寒暑を厭はず、風雨を意とせず、瞬間も手に書籍を放たず、只管學事に心を注ぎしかば、十五歲の春教師の賞詞をかふむりて、首尾よく此校を卒業し、築地の高等女學校に入校したり。

好事魔多く歡會永し難し、一家の柱石と頼みし兄直吉は、病の爲に世を早くしぬ、悲慘の鉄杖は、大に女史が精神の平和を失ひ、死生の岐に迷ふに至りしも、靈活の光明は女史の心を勵まして、女史をして決心せしめしは、妾女なりと雖も家兄に代り、兩親の養育、弟妹の薰陶に當らんとのことなり。是より女史は夢暖かなる春の曉にも、必ず未明に起き出てゝ自ら炊事を爲し、弟妹を助けて學校へ行かしめ、獨り一家のことを爲し終へて後、二里には近き築地の學校へ通ひ、歸途上六番丁の溫知塾にり到て數學を學び、それより池の端茅町の馬杉氏方に行きて漢籍を修め、夕陽西に沈みて月光草露にくたくる頃、漸く我が宿に歸るを常とせり。また雪みぞれ窓うつ冬の夜さむにも、町內より學びに來る、數十の小女を教へて、僅の報酬を得、之を己が學資に充てゝ、一歲の星霜いさゝかも怠ることなく黽勉その効空しからで、遂に築地の女學校をも卒業し、進んて東京女子高等師範學校に入學せしは、實に明治廿三年の四月にして、女史が十七才の春にぞありける。

貧苦のうちにありて小學校を卒へんとするだに至難のものなるに、況してや高等の學業を修むるに於てをや。女史は赤貧洗ふが如きうちにありて、高等女學校を卒業し、更に女子高等師範學校をもと欲するは、實に至難中の至難なりと云ふへし。されば衣類は更なり、髮の飾りはき物の末に至るまで、世の流行を餘所に見て、粗惡のものに自ら甘んじ、只垢付かざる淸淨のものを晴れの着物とせり、麥と米と當分の握飯を携ひ、冬の寒き日にも足袋をはくことなく、夏の照る日にも傘を用ゐることなければ、まゝ笑ふ人のありと雖も、もとより身の愧とは思はず。銳意專心學業を卒へんとのみつとめたりしは、實に男子も及ばざる所なりとす。然りと雖も、女史も亦妙齡の處女、時に繡衣華簪の婦人を見ては、或は涙を絞りしこともあるべし。さるを唯彼を大とし是を小とし、區々たる物情を自ら制せしこそ、健氣にも亦哀れなりけれ。

あはれ憂世なるかな、吾人眼をひらいて人生の境界を達觀すれば、映じ來る物情多き中にも放蕩遊佚を人世の快事として、一世を送る富有者ありと思へば、今又斯る有望の人、窮阱に沈淪するを見る、直に天に向て其道無きを訴へんことを思ふ、嗚呼天意豈に善道に與せさるあらんや、一時の現影は造化至妙の配劑にあらさるはなきなり、女史の艱難は、女史をして益玉化せしめんとする一砥石に過ぎさりしなり。四五年前より女史の家運は愈傾頽し、殆んど前途の目的を認むべからざるに至りしかば、女史の父母は相謀りて、住み馴れし千住の家を賣り拂ひ、其を債主に償ふて、下谷竹町へ移り、一軒の小店を借り僅に鹽煎餅を商ひ、辛うして一家五人の口を糊しけり。至孝の女史之を見て、父母辛勞の狀見るに堪へず、如何にしても其勞を助けんものと、月々些少の報酬も自ら其半を割きて父母へ贈りぬ。而して休暇の日には必す家に歸りて歡を膝下に呈し、又弟妹を教へ勵ましたりき。

されど廿六年の春の雨は豈ひとり花の爲にいとへるものゝみかは、實に女史の爲には血涙なりき。母は假初ならぬ病に罹り、窮苦、窮苦を重ねて一日の生計も心安からずなり行き、療養も手を盡すこと能はずなりけり。されば女史自ら醫師の許へ到り、一家の窮苦を告げ、己れ卒業の上藥價を償ふべければ、母の病を療し給へと懇に請うて、醫師の垂憐を仰ぎ、只管看護に心を碎きぬ。されど死生は天の命する所、悲哉、此年葉月の末、母終に四方不歸の旅路をたどりぬ。あはれ女史の心裏、豈傍人の忖度し得る所ならんや。然れども天猶女史を悲境に救はず、同じ九月の末に妹と弟と多病に罹りて、危篤なりとの悲報に接しぬ。驚き馳せて我家に到れば、弟妹二人枕を並べて打伏し、氣息奄々唇頭既に血色なし。女史を見て漸く頭を擡げ、生命惜しむに足らざれども、さきだちて不孝の子たるを怨む、老衰の父上厚く奉養の任を囑すと、言未た斷たずして四肢已に冷かなり。嗚呼柱石と頼みたる兄逝きて、慈母直に跡を追ふ。今又茲に弟妹と訣る、剛骨のもの猶鉄腸を斷つ。女史剛なりと雖も血涙巾を染することなからんや。逝く水は流にまかすべし、散る花は風にまかすべし。この悲境またいかんともすべき。豈たゞ悲に沈て役任を盡さゞるは、弟妹の志にあらずと、女史茲に奮起して厚く父を慰め、弟妹をはげまし益螢雪錐股の勞を積みぬ。

天敢て無情のみならんや、正理を守る女史の至誠、豈通徹せさることやあらん。遂に積年の苦學は大に其光輝を發揮して、本年四月師範學校をめで度卒業し、今や甲府に女子教育の大任を受く。聞く女史の同地に赴くや、極めて質素を守り、八王子までは滊車に乘りしも、是より先きは、自ら荷物を荷ひて徒歩したりと云ふ。世上靡然として驕奢の風に染み、妙齡の女子一簪の價千金も猶貴とせさる時に際し、勤儉、淑德、女史の如きは實に稀なりと云ふべし。然りと雖も終りに語を寄することあり。女史よ一身の修德既に其美を成すも、多くの子女を訓導する任、實に層一層大にして且重し。願はくは女史赫耀たる功を彼地に擧げられんことを。

悲劇

魂迷月中刄

一名、桂吾良

阿波寺鳴門左衛門著

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎序　幕

(一)慈善病院二階の場。
(二)おなじく役員休息室の場。
(三)公園小山の場。

○返へし

(一)大淨寺本堂の場。
(二)おなじく墓場。

◎二幕目

(一)宮城官宅應接室の場。
(二)看護婦雪子部屋の場。
(三)澁屋本宅玄關の場。

○返へし

(一)森子爵屋敷の場。
(二)おなじく桂勉强室の場。

◎三幕目

(一)澁屋本宅坐敷の場。
(二)大淨寺墓場の場。
(三)澁屋本宅雪子部屋の場。

○返へし

(一)暗夜大淨寺途中の場。
(二)おなじく書齋の場。

◎四幕目

(一)森子爵門前の場。
(二)宮城町醫居宅の場。
(三)森子爵門前の場。
(四)森邸内民子檢屍の場。

◎五幕目

林中夜中の場。(一)。(二)。

役　名

桂晉良。
宮城純。 } 始めは軍醫。
山口進。
軍醫、赤木此馬。
子爵、森定行、(桂の叔父)。
大淨寺の和尚。
おなじく小僧、誘善。
豪商、澁屋繁太郎。
入れずみ勘太(山口の子分)。
淺見政信(赤木の友、宮城の書生)。
軍人、田邊政信(山口の友)。
家令、澤田辰之進。
寺男、莊平。
警察署長、日高秀太郎。
病人二三名、他の軍醫數名、賊數名。博徒三名、
仕出し數名、其他。
看護婦、上田浪子。
おなじく澁屋雪子。
森民子。
侍女、お松。
定行妻、淵子。
繁太郎妻、お鶴。
女中、お鍋。
看護婦長。
老婆二名、其他。
浪子の靈。
姉の靈。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎序幕。

(一)慈善病院二階の塲。

〔本舞台、上手より煉化造りの二階の一室、二三人の病者寐台に寐て居る、その一人の傍を、いま、上田浪子がくゝりかへやうとして居る。夜中、電氣の月光さし入る。この摸様よろしく、幕開く。〕

浪子。さァ、お起きあそばせ。よくくゝりかへてあげませう。

病人。ありがたう御坐りまする。まことに馬鹿な喧嘩をいたしまして、こんなにうづき出しまして、この夜中にまた御厄介をかけまする。

浪子。いえ、なァに?—何んと申しても、おつむりですから、……

病人。へエ。

浪子。それで、すこしいたみはきびしう御坐りませう。

病人。へエ、左様で御坐りまするか?〔繃帯をくゝりかへてしまふ。〕

浪子。さァ、これでよろしう御坐りませう。

病人。左様で御坐りますか、ありがたう御坐りまする。

浪子。これでおやすみあそばして、またいたみますれば、……

病人。はァ、ありがたう御坐りまする。

〔病人もとの如く横たはる。浪子椅子を窓のもとに運び、がらす戸を開け、これにもたれて居眠むる。舞台うす暗くなり、ごろ〳〵、すべて寐台を引き抜き、あとに姉の靈あらはる。〕

靈。浪子〳〵。

浪子。〔身を起す。〕まァ、姉さん、どうしていらッしゃったの?—あなたはほんにあの世で、おとッさんやおッかさん兄さんと御一所だから、わたしゃうらやましうてねェ、—ひとりのこるわたしは、もう、うらみなはこのからだ。たとへ、この廣ろいあめつ地が消えうせても、いま更らおそろしうは御坐りません。いッそ、死んでしまッたら、この苦勞も無くなるものを。それではまた、この世にうまれた甲斐なければこそ、かうしていつもつとめて、人を助けて居ますが、わたしゃ人にかほを見られるのがねェ、いやでたまりませんよ。

靈。いもとゝしたとが、まァ、うらめしいわいの。さう隱くさずにいッたとて、あねでャ無いか、何んの耻ぢ?たゞ一とこと、桂さん慕たッて居ると……

浪子。あら、姉さん!おッかさんもおッしゃったでせうに。—「血のけがれたこの家、どうせこの世のうもれ木。おまいもよめに行ッたとて、またあねのやうに捨てられ、うらみ死にをさすが悲しい。」—「いえ、もう、わたしは決してよめ入りはいたしません。おッかさん、それは心配してくださんな」と、あなたのうらみ死にがわかッたあとで、ふたり泣いてちかひましたを、もう、あなたもお聽きなさッたでせうに。それに、どうして、桂さんお慕たひ申されませう?

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

靈。だが、まァ、衣のびがたきはこのかよわひをなでのむね。世のなさけにほだされ、いなまれぬ義理もある。

浜子。あら、まだ姉さんはうたぐッて！たとへ、わたしャ桂さん愛して居ても、それはね、あなたを愛してるのとちッともちがやァしませんわ、兄弟のやうにしてヱるのですから。いち度、わたしャ身のうへはなさうとおもッても、こればかりはどうしてもいひにくいッて。

靈。あゝ、浜子！かうしたわねのうらみも、たゞ血すぢの腑甲斐なさ。これがもとで、おまいもまた未來までも……

浜子。えゝ？

靈。かなしや、またうらみがのこるぞよ。

浜子。それャ何んと？

〔大ぞろ〳〵、幽靈消ゆ。あと、もとの如く月皎々、浜子倚子にもたれて目のさめたこなし。〕

浜子。いまのはゆめであッたか？――お慕たはしき君ゆゑ、こころはひとり焦がれても、まことつらいはこの身のうへ。何んたる神のさだめか、けがれ果てた血のすぢ。「これがもとで、おまいもまた未來までも」とは、早やいまからうらめしい恥ぢ持てるこのからだ。〔窓より、したたのぞきつゝ〕その樹かげに御坐るこひしき兄うへ、何にをひとりで思案のふちに沈むみこゝろ、おなさけ深かいあなたは、わたしャゆめにもうつゝにも決してわすれませぬ。たとへ、わたしはわけあッて、全くつらきまじはり絶ッては居りますれど、どうぞ、桂さま、〔手を合はす〕このいやしいわたしをながくいもとゝおもッてくださりませ。

〔奥より、[illegible]雪子。〕

雪子。上田さん。

浜子。はい。

雪子。どうして、窓をあけたり？

浜子。ひとり言をいッてたの。

雪子。ひとり言？〔窓によりかゝる。〕まァ、この月、いゝとね！こころから冴えわたッては、なか〳〵、居寐むッたりする人のまねは出來ませんよ。

浜子。それでこそ、あなたはわたしのいもと。

雪子。さうですとも。〔かたわらの倚子を以ッて來て、これに倚る。〕どうもいゝ月なよ！考がへてると、ちッとも寐むたくはありませんよ。

浜子。それはさうですが。

雪子。當番はたび〳〵たッても、こんな月は無いよね。

浜子。まァ、めづらしいよですとも。

雪子。うれしいやら、かなしいやら、まァ、どうしたらいゝのでせう？

浜子。どうもしませんわ。

雪子。それでも、こんな時にはなしでもしなけれャァ……

浜子。わたしはいまゆめを見たの、病人を看護してヱたとおもッたら亡くなッた姉さんに逢ッた。

雪子。そんなら、やッぱり寐むッてたんでせう？

浜子。それャァ、わたしだッて寐ますわ。だが、氣がゝり。

雪子。どんなゆめ？

涙子。いえ、なァに、何んでも無いの。
雪子。いッてもいゝでやァありませんか？
涙子。聽いたッて、仕かた無いでせう？
雪子。それでも、聽きたいもの。
涙子。そんなら、見たとしとけばよろしい。
雪子。だッて、寐むッたり。あの人に見られたら、不勉强だといはれるに。
涙子。どうして居るやら？
雪子。ほゝゝ、わからないッて？きッとあの樹陰で考がへていらッしゃいますわ。〔立ちあがッて窓に倚る。〕呼んで見やうか？
涙子。これ、馬鹿な、およしなさい。
雪子。まさかわたしゃ馬鹿でも、そんなとを？—あなたのやうにしゃべッてよく耻づかしく無くッて、まア。〔もとへもどる。〕
涙子。わたしだッて、いつ、どこで、どんなとしゃべりました？わたしはいまゝで、あの人のとそんなにしやべッたおぼへは御坐りません。
雪子。ほゝ、なにも、そんなにおこらなくッてよう御坐んす。
涙子。それでも、そんなにいふから。
雪子。はい、御免なさい。
涙子。澁谷さん。
雪子。はい。
涙子。あなた、なぜ、またそんなに—ほゝ、ふくれなくッてねェ。
雪子。ふゝッ！ふくれて居ませんわ。
涙子。いまおこッたからすが、また出て吹き出したわ。—あの、澁屋さん。
雪子。なに？
涙子。あの、宮城さんはね、……
雪子。なに？
涙子。あの、いやな人ですねェ、奥さんを持ちながら？
雪子。さう、いやな人！あの、きのふ、わたしの部屋へ來てね、—失敬では御坐いませんか、—なんぼ馬鹿だッて、あなたを、—馬ァ鹿！欲しいッていッてくれッて。さうすると、自分もわたしの兄だからと。
涙子。えゝ、そんなと？—馬ァ鹿！—して、あなたそのときどういッて？
雪子。どういッてゝ、わたしゃ腹が立ッたし、耻づかしかッたし、あきれたから、だまッてた。
涙子。だまッて？
雪子。いえ、わたしゃおきおもひ切ッてね、そんなと知りませんといッてやッたの。
涙子。氣味がいゝわ。—きのふもね、切斷室に居たら、だまッてわたしの手を握ぎらうとしたのよ。
雪子。そんなと、まァ、ほんとにあッたんですか？まァ、こわいと。—うか〳〵しては居られませんねェ？
涙子。若しいふ通りになッたなら、わたしをどうするつもり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

だらう?

雪子。わたしゃこわくってよ、胸がどき／＼するわ。

浪子。そんなに卑恐な人なら、もう、たよりにしません。なぜをとこらしく無いだらう?

雪子。それでも、宮城のやうなわるいものがあるもの。

浪子。世間にでたら、なほ更らけがらはしいとばかり。

雪子。あゝ、もう、交際はたゞ三人。

浪子。互ひのむね開らけて、一點のくもりのこさず、……

雪子。さえ渡る月のうち、……

浪子。はゆると聽く桂の……

雪子。その名きよき人こそ、……

浪子。ふたりが身の兄うへ。

雪子。あ、その兄うへのもの、これを。〔懷中より一通。〕

浪子。なに?

雪子。さゝ、あげませう。

浪子。あなた、いつ頼まれて?

雪子。お晝ごろ。

浪子。さう?ありがたう。〔讀み終ッて、倚子にもたれる。〕

澁屋さん。

雪子。はい。

浪子。あなた、赤木さん知ッてゝ?

雪子。〔はッと胸に塡へたこなし〕 それ知ッたッて、—ねェあなた、いまの手がみは何んです?どうぞ見せて。〔取らんとする。〕

浪子。いえ、これは。〔押しかくす。〕

雪子。どうぞ。〔また取らんとする。〕

浪子。いけません、この子は!

雪子。そんならよろしい、御勝手になさい。わたしひとりのけもの。よろしいです、わたしは。

浪子。またふくれていらッしゃい。

雪子。それでも、そんなに。—あなた、あのう、それ、赤木さんは、ねェ、

浪子。はい。

雪子。なぜ、そんなにとぼけて?

浪子。何んの、とぼけますものか?

雪子。それでも、あなたは。—あのう、あの人は、あの、どんな人でせう?

浪子。澁屋さんのおしたひなさるおかた。

雪子。また、そんなこと、あなたは。どうですよ?

浪子。それは、あなた、桂さんのお友だちですから、活潑なおかたですとも。軍人軍醫の常として、つるぎ帶びるすがたはひかりいともいさましく、むねにこもるなさけはみどり深かき愛の川。

雪子。それゃ神かけて……

浪子。お慕たはしき……

兩人。人じゃなア。〔隣室にて病人のうめく聲。〕

浪子。また目が覺めたかして。

雪子。早やく行ッておやんなさい、苦るしんでますよ。

浪子。わたしは、あさッて、休暇を取りますよ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

（前の本文に續く）

左の十一行にて第一段を終るが故に、こゝに假りに掲載して、讀者の情感をなぐさむ。但し此の十一行は、次回の本文中に再たび印刷すと知るべし。

雪。なぜ？
涙。よそへ行くから。
雪。そんなら、いまの手がみが、……
涙。まア、何んであッてもよろしい。またあさで。〔立つ。〕
雪。いッてくれても、いゝでャアありませんか？
涙。また！いゝていッたでャアありませんか？
雪。そんなら、よろしい。わたしは、もう、聽きたくありません。
〔またうめく聲。〕
涙。あれ、苦るしさうに。早やく行ッてやりませう。
雪。わたしも見まはッて來ますから。
〔木のかしら、兩人入る。またうめく聲にて、道具廻はる。〕

小此木、布川同著
俳諧史傳 全 正價金三拾錢 郵稅金四錢

池袋清風大人著
淺瀨の波 第一編 正價金二拾八錢 第二編 正價金三拾二錢 郵稅金四錢宛

星野愼之輔君編
應用植物編 全 正價金四拾錢 郵稅金六錢

同
昆虫植物金石 **採集法** 全 正價金八錢 郵稅金二錢

發賣所 女學雜誌社書店

評論

八月十五日發兌 第二十七號

臨機高嘯
一大時機を觀る
眼前の熱動
大才出づるの機會
達人は至寶なり
大才須らく山を出づべし
英語及び日本語
維新の大事業

日本人外國傳道の聲
日本は大國なり
南洲先生を景慕す
深谷大澤原地を遣せ
英魯何れか心友
來るべき機會

偉人物
十四頁の一大長論文

岐阜縣治水大策
精緻の表一葉あり

●**紳士貴女へ廣告**

法律學専門にて英語發音の頗る美なる教師あり紳士貴女の自宅へ招きに應じ法律學又は英語學の教授すべし

赤坂區高樹町十二番地 霜楓園

(女學雜誌)第三百九十四號(明治廿五年三月十五日遞信省認可)明治廿七年八月廿五日發行發兌

第二回 女子夏季學校廣告

來三十日午后四時より横濱山手百七十八番館フェリス女學校に於て開校す◎聽講料一人二十錢、寄宿料一日十錢、夜具は別に賃借を要す◎聽講は女子のみとすれども附添の父兄及女子教育に從事する又は從事せる男子の來會は差支なし◎九月七日午后七時閉校◎右廣告す

第二回女子夏季學校　書記

明治女學校生徒募集

普通二年級へ(小學高等科卒業相當の者)廿名、同三年級へ十名、高等文科一年級へ五名入學を許す志願の者は九月十日迄に申出べし●小學全科卒業の者は入校后三年にして普通科を全了するを得●學資は授業料毎月一圓二十錢寄宿料一切三圓八十錢圖書費凡そ一圓乃至二圓程とす

東京麹町區下六番町六番地
明治女學校

裏錦

八月十五日發行
第貳拾貳號要目

●婦人と法律「承前」　賀古保五郎
●主の箴言　五十嵐子
●夏期の家庭　矜旅子
●徐世賓　貞子
●月夜のすさび　小衣子
●蒼蠅を愛する詞　蕣華女
●玉章「朝貌」　しら菊
●桐廼舍かつら子にこたふる文　千泉
●夏の夕ぐれ　機曲
●蓮の露　賀古夢
●女武者　殘月庵主人
●カザックの錢騎　殘主

定價一册六錢市外郵税一册ニ付一錢

發行所　東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地
尚絅社

神戸女學院生徒募集

本院九月十二日始業豫備普通高等の三科共其學力に應し入學を許す有志者は九月上旬迄に御申込あるべし

神戸市山本通四丁目○舊英和女學校○神戸女學院

女學雜誌前號要目

戰時雜感　此の大時節に際會して警思する所ろ多し。戰争の福音に聽き、生死の疑問に問ひ、一國の天職を思ふ。即ち是れ編者尤とも謹嚴の筆。

譜道の眞心　無光子初めて文壇に登り多年の抱負を一朝に吐發す。今や譜道廢れ、丹青を語るもの赤誠うすし。此人の如き即ち斯道を中絶に興すもの。

美なる實行の活例　聖賢あり、たゞ之を敬視せざるは耳。此人の如き、即はち万人の教範とすべし、讀みて感激せざるものの誰ぞ。

つまさだめ　露葉子、孤高靜修の筆を染めて、稀に吟ずるの詩胸をうつす。前后二談、紙六頁。情緒綿々、餘韻盡くるを知らず。何んぞ凄靈なる。

是れ國民大警醒の時機　山月子、慷慨、謹厚の筆を以て蹶勃の思をやる。文短、意切。まことに預言者の調。目下まことに讀まざる可らず、又警醒せざる可らず、

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	前金
一回	十錢
同 三回以上	一割引
同 六回以上	二割引

○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に雜誌十部注文を要し以上半部増さ定む。右

本誌代價

册數	定價前金	市外定價郵税共
一册	金六錢	金六錢五厘
十册	金五十八錢	金六十三錢
廿六册(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二册(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

發行所　東京府北豊島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY